

第二反抗期に対する認識と自我同一性との関連

(教育心理学教室) 江上園子

(愛媛県警察) 田中優子

Effects of Adolescent cognition about the rebellious stage on their ego identity

Sonoko EGAMI, Yuko TANAKA

(平成25年7月24日受理)

問題と目的

これまで、さまざまな発達理論の中で青年期はとりわけ葛藤の多い時期として捉えられてきた。久世(2000)によると、青年期はおよそ10歳代から20歳代半ばころまで、つまり思春期的変化の始まりから25歳くらいまでの子どもから大人への成長を以降の時期とされている。従来、青年期の時期は“疾風怒涛の時期”とされ、青年たちは“境界人”であるといわれてきた(白井, 2006)。青年はこのような“揺れる”時代を経て、成人していくという発達の姿は広く知られるところである。

これに関して、青年期の危機が個体発生のうえで必然であるとする考え方を「青年期危機説」と呼び、必然でないとする考え方を「青年期平穏説」と呼ぶ。青年期危機説では、親や教師などの大人との葛藤や対立、自分をとりまく社会への反発心などを経験して、青年は成人になっていくとしている。その際の大人に対する態度が反抗的であるということから、思春期、青年期前期を「第二反抗期」であるとも言う。この第二反抗期について、山口(1991)の定義によると「反抗期は12,13歳頃のいわゆる思春期からあらわれる。この時期は自我が急速に成長し、独立した一個の人格が確立されようとする時期であり、精神面での独立・自立欲求が高まってくる。親や年長者に対する反抗だけにとどまらず、社会的な権威、制度、通念など抽象度の高い対称に対しても反抗的

な態度があらわれる」ことであるという。この、子どもの独り立ちへの希求、すなわち心理的離乳(落合・佐藤, 1996)とそれに伴走できない大人への異議申し立ての時期を経て、大人と対等の存在になっていくという青年期危機説は、これまで、我が国でも広く支持されてきた(白井, 1997)。

しかし近年では、青年期危機説に異論を唱える青年期平穏説に依拠する研究が散見される。Compas, Hinden, & Gerhardt (1995)によると、西欧諸国では20世紀のあいだに、青年期をストレスフルな時期として捉えるところから、それよりもむしろ青年期こそ発達において重要な時代であるというポジティブな認識に移行したという。我が国でも、宮野(1984)は反抗現象が青年期の一般的な特徴とは言えないと結論づけており、深谷(2004, 2005)も、第二反抗期とされる時期の多くの親子関係がむしろ良好であるということを示した。

反抗期に関しては第一反抗期と第二反抗期が知られているところであるが、海外でも“terrible two”として表現されている2歳から4歳頃にあらわれる第一反抗期が自我の“萌芽”ならば、この第二反抗期は自我の“確立”の時期とも言える。Erikson(1959 小此木啓吾訳編 1973)による心理社会的発達理論(漸成理論)でも、青年期の発達課題は自我同一性(アイデンティティ)の確立とし、これを通して青年は自分を社会の中の一員として位置づけていくことができると考えられてい

る。また Marcia(1966)は、Erikson の理論に基づきつつ、青年期のアイデンティティの様相を“クライシス”と“コミットメント”の2要素の有無から類型化するアイデンティティ・ステータス論を提唱し、アイデンティティを達成するためには自分は何者なのかと悩んだりいくつかの可能性を吟味したりするクライシスと、自分なりの目標や信念を掲げてそれに邁進していくというコミットメントが必要であると論じている。

このように、青年期にかかわる議論でその是非も含めながら着目されてきた“反抗期”と、青年期の課題とされる“自我同一性”の達成(確立)であるが、これらの両者がどのように関係しているのか、反抗期は自我同一性の確立にどのように影響しているのか、またはそもそも影響力を有していないのか、実際のデータをもとに議論したものは少ない。また、我が国で反抗期の実態について明らかにした研究として女子青年を対象としたものはあっても(例えば青野, 1997)、性別を問わずに情緒的な面・言動的な面まで深く踏み込んで審らかにされている研究は見られない。実際に反抗期の“嵐”を体験したと捉えている青年はどの程度存在するのだろうか。それはどのような反抗の姿であったのか。反抗期を経験したと言及する者としらない者の背景にはどのような違いがあるのか。また経験したかしなかったかという認識の違いで、青年期の発達課題であるとされる自我同一性の獲得の様相は異なるのだろうか。本研究は、これらのようなことを明らかにするため、青年期後期に属する大学生を対象としたい。その根拠としては、これまでの第二反抗期にかかわる研究の多くが反抗期として思春期を想定していること、反抗期の出現時期として予測される思春期(青年期前期)当時の記憶が鮮明であること、反抗期当時の葛藤やコンフリクトを対象化して述べる事が可能であると想定されることが挙げられる。

以上より、本研究は目的を以下の通り定め、検討を行った。1. 大学生において反抗期を経験したと認知している者と経験していないと認知している者の割合を明らかにし、反抗期があったと認知している者に関して反抗期の対象やそれにかかわる行動、さらには反抗期から現在までの心理的な推移について調べる。この際、「反抗期」の定義については山口(1991)を提示し、理解を統一させた。2. 反抗期があったと認知している者とな

かったと認知している者、双方がそのように認知している理由や背景を探る。3. 反抗期を経験したと認知している者と反抗期がなかったと認知している者との自我同一性達成には差があるのか検討する。なお、反抗期に関する設問は、その実態を探ることを目的とすることから自由記述による回答を中心に求める。自我同一性に関しては、多次元性への着目、信頼性や妥当性の高さ、Erikson の理論との関連等、山田(2004)の解釈に倣い、谷(2001)の多次元自我同一性尺度を使用することとした。

方法

本研究における調査対象者は、質問紙を配布したE県内の大学の学生 106 名のうち、回答に不備のなかった 100 名であった。男子が 44 名、女子が 55 名、不明 1 名であった。平均年齢は 19.8 歳(範囲: 18-24)であった。調査実施期間は 2011 年 6 月～2011 年 7 月で、授業終了時に質問紙を配布し回答を求め、回収した。質問紙の配布時には、「反抗期はある方が良い、ない方が良い、などということはない」ということを教示したうえで、反抗期の定義(山口, 1991)を提示し、それに該当する状況について答えさせるようにした。

質問紙は、基本的な情報を問うフェイスシート項目の他、反抗期の有無やその内容、背景について問う自由記述、多次元自我同一性尺度(谷, 2001)20 項目によって構成されている。

結果

本研究における結果を、順に示す。自由記述箇所の分析については KJ 法を用い、教育心理学専修の教員や学生など複数による一致率をとった。本研究では一致率が 80 %以上のもののみ結果として採用する。

1. 反抗期の有無とその内容

自分に反抗期があったと回答した者は 60 名(男子 24 名・女子 36 名)、なかったと回答した者は 40 名(男子 20 名・女子 20 名)であった。反抗期の時期についての回答は Table1 に示した。

Table1 反抗期の時期 (N=60)

反抗期の時期	人数 (%)
小学校時代	5 (8.3%)
小学校から中学校にかけて	2 (3.3%)
中学校時代	30 (50%)
中学校から高校にかけて	12 (20%)
高校時代	7 (11.7%)
小学校から高校にかけて	1 (1.7%)
小学校から現在にかけて	1 (1.7%)
中学校から現在にかけて	1 (1.7%)
わからない	1 (1.7%)

中学校のときがもっとも多く 30 名、ついで中学校から高校にかけてが 12 名、高校のときが 7 名であった。

反抗の対象（複数回答）としては母親を挙げた者がもっとも多く 46 名、父親を挙げたものが 29 名、先生を挙げた者が 11 名であった。その他の回答は Table2 に示した。

Table2 反抗の対象 (N=60；複数回答可)

対象	人数 (%)
母	46 (76.7%)
父	29 (48.3%)
先生	11 (18.3%)
祖母	2 (3.3%)
祖父	1 (1.7%)
塾の先生	1 (1.7%)
自分	1 (1.7%)
周りの人	1 (1.7%)
社会全体	1 (1.7%)

反抗する気持ちを表現したかどうかについては、「表に出した」と答えた者が 56 名、「表に出そうとしなかった」者が 4 名であった。また、自由記述による反抗心の表出の仕方としては、「口ごたえをした」など直接的に出した者が 34 名、「無視する」など回避的な態度を取った者が 18 名、「ものにあたる」など間接的に出したものが 4 名であった。なお、反抗心の表出の仕方の評定者間一致率は 100% であった。

反抗期から現在までの心理的な推移は反抗期に抱いていた反抗する気持ちの程度を 5 とし、現在はその当時と比較してどの程度の反抗する気持ちがあるか、0・1・0 の値で評定させた。結果は Table3 に示した。

Table3 現在の反抗心の値 (N=60)

反抗心の値	人数 (%)
0	12 (20%)
1	20 (33.3%)
2	14 (23.3%)
3	7 (11.7%)
4	2 (3.3%)
5	1 (1.7%)
6	2 (3.3%)
7	0
8	0
9	0
10	2 (3.3%)

またその値が 4 以下の者に限り、反抗する気持ちが低くなった背景について自由記述で回答させた。結果は Table4 に示した。評定者間一致率は 90% であった。

Table4 反抗心の値が低下した理由 (N=55)

カテゴリ	具体的記述例	記述数
成長	価値観が養われたり精神的にも成長して低くなった,自分の精神面が安定した 等	14 (23.3%)
感謝	ひとり暮らしをして親のありがたみがわかって,金銭的・精神的サポートが目に見えるかたちでわかり感謝と申し訳なさから低くなった 等	13 (21.7%)
自然	だんだんと気持ちが落ち着いてきた,自然にどうでもよくなった 等	11 (18.3%)
疎遠	親と関わる時間が減っていったから,大学に入って親元を離れてから特に低くなった 等	10 (16.7%)
親密	家族が集まる場ができた,相談にのってもらえるようになってから 等	4 (6.7%)
あきらめ	反抗しても何も変わらないと思った,あきらめたから 等	2 (3.3%)
その他	大学生 等	1 (1.7%)
無回答		5 (8.3%)

2. 反抗期があった（なかった）とする理由・背景

反抗期があった（なかった）と認知する理由や背景について、自由記述による回答を求めた。反抗期があったと認知する者が述べた理由を Table5 に、反抗期がなかったと認知する者が述べた理由を Table6 に示した。評定者間一致率については、反抗期があったと認知する者の回答では 80 %、なかったと認知する者の回答では 100 %であった。

3. 反抗期の有無と自我同一性得点との関連

多次元自我同一性尺度について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、ならびに信頼性分析の結果を Table7 に示した。

谷(2001)と同様に4因子構造であり因子項目も同様であることから、順に「自己斉一性・連続性」「対自的自我同一性」「対他的自我同一性」「心理社会的同一性」と命名した。

次に、反抗期があったと認知している者となかったと認知している者とで、多次元自我同一性のそれぞれの下位得点（因子得点）で差が認められるか検討するためにそれぞれでT検定を行った。結果を順に述べ、それぞれの平均値と標準偏差は Table8 に示した。

「自己斉一性・連続性」においては 5%水準で有意差が認められ($t(98)=2.72, p < .05$)、反抗期がなかったと認知している者の得点が高いということがわかった。

「対自的自我同一性」においては有意差が認められず($t(98)=1.18, n.s.$)、反抗期の認知の有無による得点差がないことがわかった。「対他的自我同一性」においては 5%水準で有意差が認められ($t(98)=2.04, p < .05$)、反抗期がなかったと認知している者の得点が高いということがわかった。「心理社会的同一性」においても 5%水準で有意差が認められ($t(98)=3.41, p < .05$)、反抗期がなかったと認知している者の得点が高いことがわかった。

Table5 反抗期があった理由 (N=60)

カテゴリ	具体的記述例	人数 (%)
自分の自立心から	自分の力で生きていけると思っていたから、自分のことは自分でしたいという気持ちがあったから	12 (20%)
親のせい	親が過保護すぎたから、親の普段の態度や性格	10 (16.7%)
それ以外のせい	中学の先生のストレスをぶつける場所が欲しかったから、環境が変わって常にイライラするようになったから	8 (13.3%)
相互理解の欠如	母親と考え方が少し違っただけ、子どもじゃないと思う自分と子ども扱いする親とのぶつかりあいのため	7 (11.7%)
必然性	思春期だから	6 (10%)
自分の不安定	自分というのがすごく不安定で感情的になってしまうから、自分の中でいろんなことに葛藤する気持ちがあつて悩んでいたと思う	6 (10%)
自分が未熟だから	まわりが見えていなかったから、頭が悪かったから	4 (6.7%)
関わりの少なさ	父親とあまり話さなかったから、親との会話が少なくなって自分の意志が通らない場合が増えたから	3 (5%)
無回答		4 (6.7%)

Table6 反抗期がなかった理由 (N=40)

カテゴリ	具体的記述例	人数 (%)
家庭・環境の良さ	父や母がいい意味で自由にさせてくれた、家族・日常生活に不満が無いから	15 (37.5%)
自己抑制	反抗する気持ちを自分の中に押し込めていた、波風起こしたくない性格、あまり自己を出さなかった	7 (17.5%)
きょうだいの反抗期を見て	兄の反抗期を見てきてその姿にあきれていたから、姉の反抗期を見て近くでみていたから	3 (7.5%)
親が厳しかったから	親が厳しく、反抗の意思を持つだけの余裕すらなかったため、父親が暴力で制していたのでそれが大きい	3 (7.5%)
不明	わからない	3 (7.5%)
その他	反抗する気がまったくなかったから、反抗するほど一緒に過ごす時間が無かった	9 (22.5%)

Table7 多次元自我同一性の因子分析の結果 (主因子法・プロマックス回転)

項目	F1	F2	F3	F4
9. いつのまにか自分が自分でなくなってしまったような気がする。	-.897	.103	.078	-.111
5. 過去に置いて自分自身を置き去りにしてきたような気がする。	-.872	.075	-.191	.260
1. 過去に置いて自分をなくしてしまったように感じる。	-.845	.130	.181	-.097
17. 「自分が無い」と感じることもある。	-.682	-.170	.050	-.101
13. 今のままでは次第に自分を失ってってしまうような気がする。	-.552	-.070	-.164	-.130

2. 自分が望んでいることがはっきりしている。	-.015	.988	-.090	-.077
10. 自分のすべきことがはっきりしている。	-.074	.967	-.034	-.095
6. 自分がどうなりたいのかはっきりしている。	-.164	.914	.014	.040
14. 自分が何をしたいのかよくわからないと感じるときがある。	-.346	-.578	-.175	.260
18. 自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある。	-.424	-.476	.097	-.131

3. 自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う。	.125	.012	-.989	.138
11. 人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる。	-.052	.071	-.920	.117
7. 自分は周囲の人々によく理解されていると感じる。	-.207	.062	.726	.263
15. 本当の自分は人には理解されていないだろう。	-.275	.023	-.639	-.045
19. 人前での自分は、本当の自分ではないような気がする。	-.110	.055	-.581	-.226

20. 本当の自分の能力を生かせる場所が社会にはないような気がする。	-.067	.122	.165	-.889
16. 自分らしく生きてゆくことは、現実の社会の中では難しいだろう。	-.048	.240	-.080	-.887
12. 現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う。	-.175	.354	.024	.669
8. 現実の社会の中で、自分らしい生活が送れる自信がある。	-.023	.231	.201	.580
4. 現実の社会の中で、自分らしい生き方ができる。	.296	.211	.013	.445
因子寄与	6.72	6.62	6.39	6.56
信頼性(α)	.850	.871	.866	.859

Table8 多次元自我同一性得点の平均値(SD)

	自己斉一性 (連続性)	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性
反抗期あり	16.01 (5.07)	14.40 (5.42)	13.70 (4.49)	14.38 (4.36)
反抗期なし	18.83 (5.10)	15.63 (4.50)	15.55 (4.39)	17.30 (3.93)

考察

本研究は、青年期における第二反抗期について大学生に振り返って記述させ、反抗期の有無やその実態と自我同一性との関連について検討するものであった。

反抗期の経験について調べたところ、反抗期があった

と認知している者が6割、なかったと認知している者が4割であった。このことは白井(2002)が述べているように、近年、反抗期が発達の必然ではなく、実際には多数の青年期における親子関係が緊張や葛藤を伴わず良好であるということの証左であると言えるだろう。反抗期

を経験したと回答する時期については、山口(1991)のように、中学生つまりは青年期前期頃がもっとも多いということも確認された。反抗の対象としては、母親を対象に挙げた者が76%に達している。父親を対象に挙げた者は48%であり、周囲の大人のなかでももっとも身近であろう両親とくに母親が反抗の対象となりやすいことがわかった。佐々木(2011)によると、周囲の大人が反抗する相手であるためには、まずその大人と何らかの関係がなければならないとし、反抗が反抗であるためには「本来抗うべきでないとされている相手」としての大人が必要だとされている。つまり両親は子どもを継続的に守り育てていく存在であり、本来抗うべきでないとされている相手に相当する。そのなかでも我が国の母親は子どもとの関係性がより強い(柏木, 2011)ため、母親が反抗の対象になり易いのだろう。

反抗する気持ちの推移については、ほとんどの者が大学生である現在、反抗していた時期よりも落ち着いてきているということがわかった。その理由としては、「自分の成長」や「親への感謝」について述べる者が多く、自分の反抗期について成長の糧としてポジティブに振り返っていることがわかる。また「自然」や「疎遠」のように、自分ではとくに意識していないが、環境の変化、親との距離の開き方によっておさまったという認識もある。興味深いことに、少数ではあるがその逆の「親密」という理由を述べる者もいた。反抗期では距離が開いていた(距離を開けていた)親と距離を縮めたことにより反抗的な気持ちが低下したという。このように、反抗期を経験した大学生で現在は落ち着いているというように、同じ状況下にいる者のなかでも、かなりバリエーションに富んだ理由を述べているところが面白い。

次に、反抗期があったと認知する者が述べた理由について考察する。発達不適合理論では青年と環境との適合性が低い場合に青年の葛藤や危機が生じる(白井, 2002)とされている。本研究でもこの理論と関連する記述が散見された。「自分の自立心」「親のせい」「自分以外の人・もののせい」「相互に理解できていなかったため」のいずれも、青年と環境との適合性が低い場合に生じるものだと考えられる。例えば、自分の自立心が増大した結果として反抗的になるとしても、周囲の環境がその自立心を十分に満たすものであれば結果的に反抗的な気持

ちは低下するかもしれない。また、親の過干渉が原因で反抗的な気持ちとなる場合も、その背景には子どもをいつまでも「子ども扱い」する親と、「大人になろうとしている」自分との不適合が問題であるということだろう。続いて、反抗期がなかったと認知する者が述べた理由についても考察する。反抗期がなかった理由としては「家庭・環境が良かったから」という回答がもっとも多い。日常生活における不満や悩みが生まれたとしても、もっとも身近な環境で満たされていることにより、それらを解消できていた可能性が示唆される。しかし、少数ではあるが、「自己抑制」のように、反抗する気持ちを自覚していても自分の中に押し込めたり、波風を起こしたくなかったりして、行動としての反抗期はなくとも気持ちとして潜在していた場合も見受けられる。また、「親が厳しかったから」という理由もある。第一反抗期がなかった子どもに関しては親や周囲の評価基準に基づいた“よい子”であろうとする“みせかけの自己像”が形成されてしまう(餅原, 2004)という指摘もある。発達段階が異なることから第二反抗期がなかった場合もこのような解釈ができるとは言えないが、本研究で見られたように反抗したい気持ちが未消化のままの例では、青年期を経て親と同等の力を持つようになる成人期以降などに何らかの親子関係のひずみを生み出す危険性も推測される。あるいは、成人期以降に親子関係が疎遠となり、距離を保ったまま安定するという可能性もあるだろう。平石(1999)は、青年期の親子関係は2つの異なった視点を重視する立場に大別できると述べている。まず、青年・両親間の分離や葛藤・脱理想化などの視点を重視する立場と、次に、青年・両親間の親密さ・愛着関係・結合性などの視点を重視する立場である。本研究のデータからはその双方の特質が抽出されたが、反抗期があったと認識している者はこのうちの前者、なかったと認識している者はこのうちの後者の印象が強い。

反抗期の有無の認知と自我同一性の関連については、反抗期がなかったと認知する者の方が、「自己同一性・連続性」「対他自我同一性」「心理社会的同一性」の3つの下位尺度得点において高いということがわかった。すなわち、反抗期がなかったと認知している者の方が、自己の不変性および時間的連続性の感覚や、本当の自分自身と他者から見られている自分自身が一致するという

感覚、自分が理解している社会的現実のなかで定義された自我へと発達しつつあるという感覚が強いということである。これらの結果から、反抗期というものを経験することにより、その終期には自分を捉えにくくなる時期が生じる可能性が推測される。溝上(2011)は、親友や密接な他者(異性)といった新たな愛着対象との対象関係の構築をもとに、それまでの両親を含めた愛着対象との対象関係全体の再構築が起こるとしている。反抗期を経験したと認知した者は、反抗期中核的な行動や心理はすでに沈静化していたとしても、反抗期のときに生じた葛藤・コンフリクトがいくらか残っている可能性は否めない。そしてそれによって自己と他者との関係を問い直し、自我同一性を再構築しようとしている、もしくはいままさに再構築している最中であるとも思われることから、自我同一性の得点が低かったということも考察できる。本研究の反抗期があったと認知している者の記述にもあったように、反抗期で生じた親との葛藤が、自分が理解されていないという感覚としてわずかに残っているのかもしれない。また、伊藤(2013)は反抗期を親離れ・子離れに向かうための一種の“イニシエーション”と捉え、反抗期がない場合として、早い時期から親が子どもの人格を認め、「対等な大人」として扱ってきたという場合を挙げている。これは本研究でも反抗期がなかった者の記述から確認できるが、このような場合、子どもは周囲から理解されていると感じ、社会でも自分らしくふるまえるという感覚を身につけられるということが想定される。そのため、反抗期がなかったと認知している者の自我同一性得点が高かったという可能性も高い。これは、今日の養育者が子どもに愛情と自由としつけをバランスよく与えるという、民主主義的な親子関係の実現をなし得た結果ともいえる(白井, 1997)。

最後に本研究の課題について述べる。本研究は大学生が主観的に捉えた自身の反抗期について調査したものである。しかし、細田(2008)が指摘するように、反抗期についての認識や印象は本人と周囲の大人によって異なることが容易に想像される。親からの視点も取り入れて再検討する必要があるだろう。また、大学生という時期は反抗期の終期から直後の時期にあたるため、先述したように、反抗期があったと自覚している者の中で、いままさに自我同一性を確立している最中の者が存在す

る可能性も否定できない。例えば Arnett(2000)によると、自分を「大人である」と認識するのは20代後半であるという。大学生以降、例えば成人期初期などの者も対象としたうえで、反抗期と自我同一性との関連についても検討していく余地がある。さらに、近年では反抗期の有無だけに着目してその可否を論じることの危険性が指摘されている(例えば伊藤, 2013)。本研究では反抗期の自覚の有無により大学生の自我同一性得点に差が見られたが、一方で自由記述での回答から、反抗期があった者のなかでの親子関係の差異、なかった者同士での親子関係の差異についても明確に読み取ることができた。したがって、今後は反抗期の有無だけではなくその内容、とくに親子関係の違いに着目して、自我同一性獲得との関連について詳細に検討しなければならないだろう。

文献

- Arnett, J. J. (2000). Emerging adulthood: A theory of development from the late teens through the twenties. *American Psychologist*, **55**, 469-480.
- 青野篤子 (1997). ジェンダーの観点からみた第二反抗期—女子大生の調査を通して—. *心理科学*, **19**, 1-8.
- Compas, B. E., Hinden, B. R., & Gerhardt, C. A. (1995). Adolescent development: Pathways and processes of risk and resilience. *Annual review of psychology*, **46**, 265-293.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company. (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性 誠信書房).
- 深谷昌志 (監修) (2004). 中学生にとっての家族—依存と自立の間で—. *モノグラフ・中学生の世界*, **77**. ベネッセ未来教育センター.
- 深谷昌志 (監修) (2005). *モノグラフにみる中学生のすがた*. *モノグラフ・中学生の世界 特別号*. ベネッセ未来教育センター.
- 平石賢二 (1999). 青年期後期の親子間コミュニケーションの構造に関する研究—個性化モデルの視点から—. *青年心理学研究*, **11**, 19-36.

- 細田憲一 (2008). 反抗期のない子は問題か—反抗期の意味を考える—. 児童心理, **62**,1471-1475.
- 伊藤美奈子 (2013). 「反抗期がない子」を考える. 児童心理, **67**,48-53.
- 柏木恵子 (2011). 親と子の愛情と戦略. 講談社.
- 久世敏雄 (2000). 「青年期とは」. 久世敏雄・齋藤耕二 (監修) 青年心理学事典 (pp.4-5.) 福村出版.
- Marcia, J.E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**,551-558.
- 宮野祥雄 (1984). 青年期における親への同調と対立に関する研究. 心理学研究, **55**,261-267.
- 溝上慎一 (2011). 反抗期のない大学生. 教育と医学,**59**, 438-445.
- 餅原尚子 (2004). 反抗期のない子の問題. 児童心理, **58**, 57-61.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳. 教育心理学研究, **44**,11-22.
- 佐々木玲仁 (2011). 子どもにとっての反抗期の意義. 教育と医学, **59**,414-421.
- 白井利明 (1997). 青年心理学の観点からみた「第二反抗期」. 心理科学, **19**, 9-24.
- 白井利明 (2002). 青年期へのアプローチ 白井利明・都筑学・森陽子 (著) やさしい青年心理学 (pp.1-18.). 有斐閣.
- 白井利明 (2006). 青年心理学の歴史 白井利明 (編) よくわかる青年心理学 (pp.12-13.). ミネルヴァ書房.
- 谷冬彦 (2001). 青年期における自我同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度(MEIS)—の作成. 教育心理学研究, **49**,265-273.
- 山田剛史 (2004). 現代大学生における自己形成とアイデンティティ: 日常的活動とその文脈の観点から. 教育心理学研究, **52**,402-413.
- 山口雅史 (1991). 反抗期. 山本多喜司 (監修) 発達心理学用語辞典 (pp.259) 北大路書房.
- のである。回答にご協力下さいました大学生のみなさま、質問紙の配布と回収にご尽力下さいました先生方に心より感謝申し上げます。

付記

本研究は第一著者の指導のもとで第二著者が卒業論文として書いたものの一部を、第一著者が加筆修正したも